

『梧桐雨』 雜劇の晩秋の季節

櫻木陽子

はじめに

『梧桐雨』 雜劇（『唐明皇秋夜梧桐雨』 雜劇）は、唐明皇（玄宗）と楊貴妃の物語を描く元雜劇の代表的な作品の一つである。

作者の白仁甫（白樸 一二二六—一三〇六以後）は元雜劇の作家の中では一流文人として知られている。⁽¹⁾ 彼の雜劇作品は題名のみ残るものも含めて十六種が確認され、そのうち『梧桐雨』『墻頭馬上』『東墻記』の三種が現存し、『流紅葉』『箭射雙雕』の二種が部分的に残る。この他に詞集『天籟集』がある。

『梧桐雨』 雜劇は、正末（玄宗を演じる）が「唱」（歌）を擔當する末本で、玄宗の視點で歌われる。各折の物語展開は以下の通り。

『梧桐雨』 雜劇 各折の物語展開⁽²⁾

〔楔子〕安祿山の敗戦と都での赦免、重用、洗兒會、左遷。

〔第一折〕楊貴妃による安祿山との私通の獨白⁽³⁾。長生殿での七夕乞巧の儀式。玄宗の愛の誓い。

〔第二折〕後宮で宴會中の玄宗のもとに安祿山の亂の知らせが入

『梧桐雨』 雜劇の晩秋の季節

り、玄宗は楊貴妃達と共に蜀に逃げることを決める。

〔第三折〕玄宗一行は宮殿を出るが、馬嵬坡で楊貴妃は死に追い込まれ、遺體を軍馬に踏まれる。玄宗は蜀へ向かう。

〔第四折〕亂平定後、都に戻った玄宗は夜に楊貴妃の肖像畫を掛けて楊貴妃を偲ぶ。眠りにつくと楊貴妃が夢に現れるが、梧桐に降る雨音に夢から覺めて、玄宗は一人現實に立ち返る。

『梧桐雨』 雜劇と同時代の作品で、同じ玄宗と楊貴妃の物語を描いた諸宮調に『天寶遺事諸宮調』がある。⁽⁴⁾ 諸宮調は金から元にかけて流行した語り物藝能で、元代のものは『天寶遺事諸宮調』しか残されていない。

作者の王伯成は、『錄鬼簿』に白仁甫と同じ元代前期の雜劇作家として記載されており、その記述から『天寶遺事諸宮調』は當時、非常に有名な作品であったことがうかがえる。⁽⁵⁾ 『錄鬼簿』によると、王伯成の雜劇作品には『李太白貶夜郎』と『張騫筏浮槎』があり、⁽⁶⁾ 『李太白貶夜郎』が現存する。

『天寶遺事諸宮調』は清初以降に散佚し、今日では完全な形では傳

わらないが、明清の曲選集や曲譜に約六十種の套数が断片的に残されており、作品全體の流れをほぼ把握することができる。

『天寶遺事諸宮調』の主な物語展開¹⁰⁾ (番號は任意)

- ①楊貴妃が玄宗の後宮に入り、玄宗の寵愛を受け、玄宗が後宮に入り浸るようになってからの後宮での生活を描く。楊貴妃の温泉入浴、玄宗の寵愛を受ける楊貴妃、彼女の化粧や醉酒の様子を描く話等。
- ②安祿山が楊貴妃と關係を持ち、二人の仲が親密になる。安祿山の漁陽への左遷。
- ③七夕長生殿。中秋の玄宗の月宮行。後宮で霓裳羽衣曲を演奏する話等。
- ④安祿山が左遷先で楊貴妃を思い、叛亂を起こす。
- ⑤潼關陷落。玄宗一行は馬嵬坡へ。馬嵬坡での楊貴妃の死。玄宗の蜀への行幸。
- ⑥亡き楊貴妃を偲ぶ玄宗達の追憶の日々。楊貴妃は玄宗や安祿山の夢に現れる。

『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』は、竹村則行氏が「元曲「梧桐雨」と明皇擊梧桐圖¹¹⁾」で論じておられるように、當時の知識人層に廣まっていた楊貴妃にまつわる個々の物語を、巧みに取り入れて、それぞれ物語を作り上げたと思われるが、特に楊貴妃と安祿山の私通や、楊貴妃死後の物語等、幾つかの特徴的な物語が兩者に共通した形で描かれている。

ところで『梧桐雨』雜劇には、題(正名)にある「秋夜梧桐雨」の

場面を描く第四折だけでなく、作品の主題である玄宗と楊貴妃の物語を描く第一折から第四折まで一貫して秋の季節が描かれる。元雜劇において作品全體に一つの季節が描かれることは珍しいと言えるが、このことについてはこれまであまり論じられていないように思われる。

筆者は以前『天寶遺事諸宮調』の物語展開と季節描寫の關係について論じたことがあり、その中で『天寶遺事諸宮調』では、史實を無視して、物語全體に春から秋へと季節が一度推移していくかのような大きな季節の流れが描かれており、春の季節は楊貴妃を迎えた玄宗の甘い後宮生活を、晩秋の季節は玄宗と楊貴妃の別れを象徴していると考えられることを論じた。

そして『梧桐雨』雜劇の秋の描寫は、實は『天寶遺事諸宮調』の同じ場面に描かれる季節と基本的に一致しているのである。

そこで本稿では特に、『梧桐雨』雜劇の第二折以降に描かれる晩秋の季節について、『天寶遺事諸宮調』との關連を中心に論じていきたい。

1 『梧桐雨』雜劇第二折に描かれる晩夏と晩秋の季節

『梧桐雨』雜劇第二折では、玄宗が後宮で宴を催し、楊貴妃に霓裳羽衣の舞を舞わせる等、楽しんでいるところに、安祿山の亂の知らせが入り、翌日に都を出て蜀に逃げる決意をする場面が描かれる。

『梧桐雨』雜劇には白居易の『長恨歌』を題材にしている部分が多く、第二折に描かれる物語の骨格も、『長恨歌』の「漁陽鞞鼓動地來 驚破霓裳羽衣曲(漁陽の鞞鼓 地を動もして來たり 驚かし破る 霓裳羽衣の曲)」を物語化したものと思われる。

『梧桐雨』雜劇の第一折では、七夕の夜の美しい秋の風景が描かれ

る。第二折の玄宗が登場する場面でも、セリフでは「新秋」といい、曲では晩夏から初秋に向かう美しい風景が歌われる。この後には荔枝が届けられる場面も描かれ、夏がまだ終わっていないことが印象づけられている。

『梧桐雨』雑劇 第二折 (正末は玄宗)

(正) 今日新秋天氣、寡人朝回無事、妃子學得霓裳羽衣舞、同往御園中沉香亭下、閑耍一番。早來到也。你看這秋來風物、好是動人也呵。(唱)

〔中呂粉蝶兒〕天淡雲閑。列長空數行征鴈。御園中夏景初殘。柳添黃、荷減翠、秋蓮脫瓣。坐近幽蘭。噴清香玉簪花綻。

(正末) 今日是新秋の候、朕は政務も終わって用もなし。妃が霓裳羽衣の舞を學んだというので、共に御園の沉香亭に行つて、少し遊ぶとしよう。早くも着いたぞ。ほら、この秋の風物はまことに心動かされるものだなあ。(唱う)

〔中呂粉蝶兒〕天は淡く雲は閑か。長き空に列なる數列の雁。御園の中は夏の景色が衰えてきたばかり。柳は黄色を添え、ハスの葉は翠色を減らし、秋蓮は花瓣を脱ぐ。靜寂な欄干に近づいて腰をかければ、清き香りを噴き出す玉簪の花が綻ぶ。

しかし第二折の終盤、安祿山の亂を避けるために蜀に逃げることを決めた後の曲からは、明日、宮殿を離れる時に目にする長安は、西風に吹かれ落日に照らされたわびしい風景であると、玄宗はこの時に想定していることがわかる。

『梧桐雨』雑劇 第二折 (旦は楊貴妃)

(正) 依卿准奏。便傳旨、收拾六宮嬪御、諸王百官、明日早起、幸蜀去來。

(旦作悲科) 妾身怎生是好也。(正唱)

〔普天樂〕恨無窮、愁無限。爭奈倉卒之際、避不得驀嶺登山。鑾駕遷、成都盼、更那堪瀟水西飛鴈。一聲聲送上雕鞍。傷心故園、西風渭水、落日長安。

(正末) そちの言うとおりにしよう。詔を傳えよ。後宮の女官や、諸王百官達を集めなさい。明日の朝に、蜀に行幸するとしてよう。

(旦は悲しむしぐさ) わたしはどうすれば良いのでしょうか。(正末唱う)

〔普天樂〕恨みは窮まり無く、愁いは限り無し。いかんせん緊急の時にあつては、蜀の山嶺を登るのは避けられぬ。車駕は遷り、成都を望む。更に耐えがたきは瀟水を西に飛ぶ雁が、騎馬の我らを見送る鳴き聲。傷心の故郷、西風の渭水、落日の長安。

この、一日で美しい晩夏初秋の風景から晩秋を思わせるわびしい風景へと變化する季節描寫は、單に玄宗と楊貴妃の急激な境遇の變化を象徴していると解釋するには、少し具體的すぎるのではないだろうか。

『資治通鑑』の記載によると、安祿山の反亂軍によつて潼關が陥落し、その報が入つたのは天寶十五載の六月九日(辛卯)であり、六月十三日(乙未)の早朝に、玄宗一行は宮殿を出て、翌日の六月十四日(丙辰)に馬嵬坡に着き、楊貴妃が死を賜ることになつてい

る。このように史實ではすべて眞夏の六月とされるが、『梧桐雨』雜劇では、玄宗一行が宮殿を出て馬嵬坡に向かうのは、晩秋の夕暮れの出来事として描かれているのである。

『長恨歌』や陳鴻『長恨歌傳』の馬嵬坡の場面には、季節を明確に特定できる表現はない。

『長恨歌』

九重城闕煙塵生	九重の城闕	煙塵生じ
千乘萬騎西南行	千乘萬騎	西南に行く
翠華搖搖行復止	翠華	搖搖 行きて復た止り
西出都門百餘里	西	都門を出でて 百餘里
六軍不發無奈何	六軍	發せず 奈何ともする無く
宛轉蛾眉馬前死	宛轉たる蛾眉	馬前に死す
花鈿委地無人收	花鈿は地に委てられて	人の收むる無し
翠翹金雀玉搔頭	翠翹	金雀 玉搔頭
君王掩面救不得	君王は面を掩いて	救い得ず
回看血淚相和流	回り看れば	血と涙と相和りて流る

樂史『楊太眞外傳』には、馬嵬坡の時期は「十五載六月」と明記される。また楊貴妃の死後すぐに荔枝が届けられる。

ところで、『梧桐雨』雜劇の楔子と第三折のセリフには、『資治通鑑』等史書の記載から借用している部分があり、それはセリフであっても原作當初のものであるという指摘がある。元雜劇の曲の部分とセリフの部分は、必ずしも同じ時期に書かれたものではないという意見もあるが、白仁甫の環境を思うと、彼が史實を知らなかったとは考え

にくい。むしろ白仁甫は史實の季節を知っていたからこそ、史實の六月に何とか近づけようと、第二折のうち、亂の報告を受ける前には、晩夏の季節を描いたり、荔枝が届く場面を入れたりして、史實との辻褄を合わせようとしたのではないか。しかし翌日の長安の風景には、玄宗に晩秋の季節を想定させている。ここから玄宗一行が馬嵬坡に向かう場面は、史實を無視してでも、晩秋の夕暮れを描くべきであるという意識がうかがえる。

一方、『天寶遺事諸宮調』でも、馬嵬坡に向かう玄宗一行を描く套數には、『梧桐雨』雜劇と同じ晩秋の夕暮れが描かれる⁽¹⁸⁾。

『天寶遺事諸宮調』「楊妃上馬嵬坡」套數（雍熙樂府）卷一）

「黃鍾宮醉花陰」愁據彫鞍翠眉鎖。一聲聲煎煎絮聒。情淚落秋波。

瀟灑長途、極目天涯澗。

「出隊子」離情坦坦、聽征聲愁越多。西風白草陣雲合。落日牛羊

下遠坡。烟水淒迷血淚多。

「公篇」玉容寂寞、料今生愁越多。一場寵幸起干戈。朝内君王沒

奈何。關外將軍管甚麼。

「黃鍾宮醉花陰」愁を抱いて彫鞍によりかかき翠の眉をひそめ

る。一聲一聲騒がしくて止まない。情の涙は秋波を寄せる瞳から

落ちる。うら寂しい長き道のりは、見渡す限り天の果てまで廣大。

「出隊子」別離の情は坦々としているが、出征の陣太鼓を聞けば

愁いはますます多くなる。西風は白草を吹き陣雲は合わざり、落

日のなか牛や羊は遠くの山を下りていく。烟る川はわびしくさび

れて多くの血の涙に染まっているよう。

「公篇」楊貴妃の玉のかんばせは叙しげで、思えばこの一生は愁

いがますます多くなる。一場の寵愛は戦争を引き起こしたが、朝廷の中の君王はどうしようもなく、都の外を守る將軍は何をして
いるのか。

ここでは『梧桐雨』雑劇にも描かれる「西風」と「落日」の二つの
風物が登場して、愁い多き晩秋の夕暮れの風景を作りだしている。

2 『梧桐雨』雑劇第三折に描かれる晩秋の季節

『梧桐雨』雑劇第三折では、馬嵬坡で楊貴妃が死に追い込まれ、楊
貴妃を失った玄宗が蜀に向かう場面が描かれる。

『資治通鑑』の記載では、退位した玄宗が成都に到着するのは、楊
貴妃の死後一ヶ月以上経った「庚辰」（七月二十八日）で、玄宗の蜀へ
の行幸は六月から七月にかけてのことである。

『長恨歌』では「黄埃散漫風蕭索」という寂しげな風景が描かれる
だけであるが、これは行幸の時期が「すでに秋に近い氣候^⑩」であるこ
とから描かれているという見方もある。

『長恨歌』

黄埃散漫風蕭索	黄埃	散漫	風	蕭索
雲棧縈紆登劍閣	雲棧	縈紆	して	劍閣に登る
峨嵋山下少人行	峨嵋山下	人の行くこと	少に	
旌旗無光日色薄	旌旗	光り無く	日色	薄し
蜀江水碧蜀山青	蜀江の水は	碧に	蜀山は	青く
聖主朝朝暮暮情	聖主	朝朝暮暮の情		

『梧桐雨』雑劇の晩秋の季節

『梧桐雨』雑劇第三折で季節描寫があるのは、以下の二例である。
一つ目は、玄宗一行が都を抜け出して馬嵬坡に向かう途上、玄宗が初
めて目にする荒れ果てた國土を歌う場面で、「秦川遠樹霧昏花。灞橋
衰柳風瀟洒。」などは少なくとも夏、六月の季節描寫ではないように
思われる。

『梧桐雨』雑劇 第三折^⑪

〔駐馬聽〕隱隱天涯。剩水殘山五六塔。蕭蕭林下。壞垣破屋兩三家。
秦川遠樹霧昏花。灞橋衰柳風瀟洒。煞不如碧臆紗。晨光閃灼鴛鴦瓦。
〔駐馬聽〕かすかなる天の果てには、荒れ果てた風景が五、六個
所。寂しげな林には、壞れた民家が二、三軒。秦川の遠き樹は霧
でかすみ、灞橋の衰えた柳に風が吹きつける。碧い紗の窓や曙光
きらめく鴛鴦の瓦のある宮中とは、まことに比べものにならない。

二つ目は第三折最後の曲で、楊貴妃を埋葬した後、玄宗が馬嵬坡か
ら蜀へ向かう、険しい道のりを歌う場面である。

『梧桐雨』雑劇 第三折^⑫

〔雙鴛鴦煞〕黄埃散漫悲風刮。碧雲黯慘夕陽下。一程程水綠山青、
一步步劍嶺巴峽。唱道感嘆情多、恹惶淚洒。早得升遐、休休却是
今生罷。這箇不得已的官家。哭上逍遙玉驄馬。
〔雙鴛鴦煞〕黄埃は散り廣がり悲風が吹く。碧雲は薄暗く夕陽が
沈む。一驛ごとの蜀の青い山河、一步步の劍門や巴峽。げにも
感嘆すれば情は多くなり、落ち付かずに涙がこぼれる。早く天に
昇ってしまいたい。やめやめ、結局今生は終わりなのだ。この如

何ともしがたい陛下は、玉驄馬に騎乗して泣くばかり。

この幸蜀の場面でも、第二折の、宮殿から馬嵬坡に向かう途上を想定した場面と同じ夕陽が描かれており、第二折と第三折の馬嵬坡の場面の風景に、同じ晩秋の夕暮れがイメージされているという印象を受ける。

一方、『天寶遺事諸宮調』の「玄宗幸蜀」套數には、晩秋を思わせる風物と共に、「西風」や夕陽である「殘陽」が登場する。

『天寶遺事諸宮調』「玄宗幸蜀」套數（『雍熙樂府』卷三、「詞林摘艷」卷六）

「倘秀才」冲落葉穿崑過嶺。趁衰草登山邁嶺。却甚綠暗紅稀出鳳城。
龍虎將、御林兵。好無些兒面情。

…（中略）…

「尾聲」眼見的人離西閣秋天淨。月照椒房夜不扃。心難安、意不寧。
愁如珠、淚似傾。惡風光、鬪馳騁。鴉閃殘陽背日明。鴈列西風行
不成。嗚噎蟬聲分外清。啾唧蛩吟刁厥鳴。怪石巉岩臥虎形。老樹
槎牙倒龍影。檜栢蒼松細古藤。夾道黃花開短徑。一弄兒淒涼斷刁
蹬。越教人鑽心入髓疼。想俺國敗家亡無權柄。不獨似這仗勢欺人
的暮秋景。

「倘秀才」落ち葉を突つ切つて岩や頂を通り抜け、枯れ草をかき
分けて山や峰に登る。何が、緑暗く紅稀にして鳳城を出るとい
ような情景か。龍や虎のような將軍や、御林兵は、ほんの少しも
メンツを立ててくれようとしなない。

…（中略）…

「尾聲」みるみるうちに、人は西閣を離れ秋天は淨く、月は閨房を照らし夜に門を閉めずという情景。心は安からず、意は落ち着かない。愁いは珠のよう、涙は水を傾けたよう。にくき風物が、争いながら追いかけてくる。鴉は殘陽にきらめき日の明るさを背に、鴈は西風にならぶも列を成さず。ミーミーと蟬の聲が格別に清く、チロチロと蟋蟀はすさまじく鳴く。奇怪な石や高く険しい岩は虎が臥せつた形、老樹の枝振りには龍を倒した姿。檜、栢、蒼松に細い古藤、道の兩脇の黄色い花が短い小道を開く。一幅の寂しい風景はわざとつらくあたり、ますます骨の髄まで染み入つて痛む。國は敗れ家は亡くなり權力も無い我が境遇を思えども、この勢いをかさに着て人をバカにする暮秋の風景とは比べものにならない。

總じて『天寶遺事諸宮調』では、晩秋の夕暮れの風景が『梧桐雨』雜劇よりも更に強固なイメージを持つて描きこまれていく。「西風」は、安祿山が謀反を決意する「祿山謀反」套數（『雍熙樂府』卷十、「北宮詞紀」卷六、「北詞廣正譜」第四帙目錄）から、玄宗が楊貴妃の匂い袋を見て彼女を偲ぶ「哭香囊」套數（『雍熙樂府』卷四）までの幾つかの套數に登場する。また夕陽を表す言葉は、玄宗一行が馬嵬坡に向かう場面を描く「楊妃上馬嵬坡」套數から、この「玄宗幸蜀」套數までの、馬嵬坡前後の物語を描く幾つかの套數で登場する。

ところで、馬嵬坡の場面を秋の季節で描くのは『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』だけでない。實は、關漢卿の『唐明皇哭香囊』雜劇でも、馬嵬坡の場面を秋の季節で描いている。

この『哭香囊』雜劇は『北詞廣正譜』に四つの曲しか残されていない

いが、そこには馬嵬坡で六軍が統制不能になり、楊貴妃に死が迫っている状況で、秋の草花が描かれている。

『唐明皇哭香囊』 雜劇（『北詞廣正譜』第十六帙）

〔綿搭絮〕玉簪初綻、金菊纔開、碧梧桐恰落、翠柳微凋、都做了野草閑花滿地愁。說與那教坊司、仙音院、莫落後。若得些鬆閑、共娘娘做取个九月九。

〔綿搭絮〕玉簪は綻んだばかり、金菊はようやく開き、碧梧桐は葉が落ち始め、翠柳はしおれかけ、みな「野草閑花 地を満ちる愁い」の風景を作り出している。あの教坊司や、仙音院の樂士達に、遅れないように伝えなさい。もし少しゆつくりできるのならば、妃と共に九月九日の登高をしたい。

『哭香囊』 雜劇の秋の季節は、『梧桐雨』 雜劇や『天寶遺事諸宮調』の晩秋と少し異なり、愛でるに値する美しい秋の風景であるが、史實の夏とは違う季節であることは確かであろう。

3 『梧桐雨』 雜劇第四折に描かれる「秋夜梧桐雨」

『梧桐雨』 雜劇第四折では、安祿山の亂の平定後、楊貴妃のいない宮殿で一人餘生を送る玄宗が描かれる。

『長恨歌』では具體的な季節描寫は主に楊貴妃死後の場面で登場する。その中で梧桐雨は巡りくる季節の中の一つの風景として描かれる。

『長恨歌』

歸來池苑皆依舊 歸り來たれば 池苑 皆な舊に依る

『梧桐雨』 雜劇の晩秋の季節

太液芙蓉未央柳 太液の芙蓉 未央の柳
芙蓉如面柳如眉 芙蓉は面の如く柳は眉の如し
對此如何不淚垂 此に對して如何ぞ淚垂れざらん
春風桃李花開日 春風 桃李 花開く日
秋雨梧桐葉落時 秋雨 梧桐 葉落つる時
西宮南內多秋草 西宮 南內 秋草多く
落葉滿階紅不掃 落葉 階に滿ちて 紅きも掃わず

『梧桐雨』 雜劇第四折の物語は『長恨歌』の「秋雨梧桐葉落時」という表現を發展させたものと思われる。『長恨歌』では雨に打たれて落ちた葉の描寫に比重があるが、『梧桐雨』 雜劇では梧桐に降る雨の描寫に重きをおいて、玄宗の心情を歌い上げている。

ところで、『梧桐雨』 雜劇第四折には、夏から突然、晩秋に變化する不自然な季節描寫がある。

第四折の前半では、楊貴妃の肖像畫には「荔枝花果」が供えられ、また芙蓉が咲き楊柳が青々とした夏の宮殿が描かれる。

『梧桐雨』 雜劇 第四折

一會身子困乏、下這亭子去閑行一會咱。（唱）

〔白鶴子〕那身離殿宇、信步下亭阜。見楊柳裊翠藍絲、芙蓉折胭脂尊。

〔二〕見芙蓉懷嬌臉、遇楊柳憶纖腰。依舊的兩般兒點綴上陽宮、他管一靈兒瀟洒長安道。

時に體が疲れてきたので、このあずまやに向かい、少しそぞろ歩くとしよう。（唱う）

「白鶴子」身を動かして宮殿を離れ、歩みに任せてあずまやに向かう。見れば柳はあおみどりの糸を揺らめかせ、芙蓉は胭脂の花を開かせる。

「二」芙蓉を見れば愛くるしい顔を懐かしみ、柳に遇えば細い腰を憶い起す。昔ながらにこの二つは上陽宮を引き立てているが、彼女の魂はきつと長安への道をさまよっているだろう。

『長恨歌傳』の同じ場面には「每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落（春の日、冬之夜、池蓮夏に開き、宮槐秋に落つるに至る毎に）」とあることから、『長恨歌』の「太液芙蓉未央柳」も夏の風景と見なすことができるであろう。少なくとも『梧桐雨』雜劇ではそう解釋していると思われる。

ところが『梧桐雨』雜劇ではその後、玄宗が寢殿に戻り、眠ろうとすると、急に激しい西風が宮殿内に吹き込み、外の落ち葉を舞い上げる。

『梧桐雨』雜劇 第四折⁽²⁾

一陣沉困、寡人試睡些兒。（唱）

〔伴讀書〕一點兒心焦燥。四壁秋蟲鬧。忽見掀簾西風惡。遙觀滿地陰雲罩。披衣悶把幃屏靠。業眼難熬。

〔笑和尚〕滴溜溜彫、閑階落葉飄。疎刺刺刷落葉被西風掃。忽魯魯風閃得銀燈爆。厮琅琅鳴殿鐸。撲簌簌動朱箔。吉丁當玉馬兒向檐間鬧。

ひどく眠氣がしてきた。朕は少し眠るとしよう。（唱う）

〔伴讀書〕少し心がいらいらする。四方の秋の蟲が騒がしい。ふ

と見ればすだれを巻き上げる西風が激しい。見わたせば地面一面に陰雲が立ち籠める。服を羽織り、氣がふさいだまま衝立によりかかる。罪作りの目は耐えがたい。

〔笑和尚〕クルクルと落ちてくるのは閑散とした階に落ち葉が舞っているのだ。ヒューヒューサーと落ち葉は西風に掃かれ、ヒュルルと風にゆらめいて銀臺の燈りの芯がはじける。カランカランと寢殿の鐸を鳴らし、パタパタと朱色の簾を動かし、カンカンと鐵馬は軒先で騒いでいる。

その後、玄宗は眠りにつき、夢で楊貴妃の亡靈に會うが、降り出した雨が梧桐にあたる音で夢から覺めてしまう。次第に強くなる秋雨は玄宗をますます追い詰めるばかりである。

『梧桐雨』雜劇 第四折⁽³⁾

（做睡科、唱）

〔倘秀才〕悶答孩和衣臥倒。軟兀刺方纔睡着。

（旦上）妾身貴妃是也。今日殿中設宴、宮娥、請主上赴席。（正唱）

忽見青衣走來報。道太眞妃、將寡人邀。宴樂。

（正見旦科、云）妃子、你在那里來。

（旦）今日長生殿排宴、請主上赴席。

（正）分付梨園子弟齊備着。（旦下）

（正做驚醒科）呀、元來是一夢。分明夢見妃子、却又不見了。

（唱）

〔雙鴛鴦〕斜睇翠鸞翹。渾一似出浴的舊風標。暎着雲屏一半兒嬌。

好夢將成還驚覺。半襟情淚濕絞綃。

〔蠻姑兒〕 懊惱。暗約。驚我來的又不是樓頭過鴈、砌下寒蛩、簷前玉馬、架上金雞、是兀那窓兒外梧桐上雨瀟瀟。一聲聲洒枝葉、一點點滴寒梢。會把愁人定謔。

〔滾綉球〕 這雨呵、又不是救旱苗。潤枯草。洒開花萼。誰望道秋雨如膏。向青翠條。碧玉梢。碎聲兒畢剝。增百十倍、歌和芭蕉。子管里珠連玉散飄千顆、平白地灑壺番盆傾一宵。惹的人心焦。

〔眼るしぐさ、唱う〕
〔尙秀才〕 悶々と服のまま横になり、ぐつたりとようやく眠りにつく。

〔旦登場〕 私は貴妃でございます。今日は宮殿に宴を設けます。宮女や、お上に席においていただきなさい。(正末唱う)

ふと侍女がやってきて、太真妃が朕を宴席に招いていると傳えてきた。

〔正末、旦を見るしぐさ、云う〕 妃よ、どこにいたのか。

〔旦〕 今日は長生殿で宴を設けますので、どうかおいで下さいませよう。

〔正末〕 梨園の者達に準備を言いつけなさい。(旦退場)

〔正末、はっと目が覚めるしぐさ〕 や、夢であったか。ありありと夢で妃と會えたのに、またいなくなってしまった。(唱う)

〔雙鴛鴦〕 翠鸞の羽のように結い上げた髪が斜めに垂れ下がったさまは、まるで以前と變わらぬ風呂上がりの風情で、體半分が屏風に隠れる愛らしさ。良い夢を見られそうだったのに、目が覺めてしまった。襟半分の情の涙は手ぬぐいを濡らせる。

〔蠻姑兒〕 思い悩み、あれこれ考えれば、私を夢から覺ましたのは、

樓閣の上を通り過ぎる雁でもなく、石階の下の蟋蟀でもなく、軒先の鐵馬でもなく、止まり木の上の金雞でもない。それはあれ窓の外の梧桐にそぼ降る雨。パラパラと枝や葉に降り注ぎ、ポタポタと枯れた梢に滴る。きつと愁いに沈む人を苦しめるだろう。

〔滾綉球〕 この雨は、日照りの苗を救うわけでもなく、枯れ草を潤すわけでもなく、花を咲かせるわけでもない。秋雨を恵みの雨と有り難がるものがあるであろうか。青翠の枝、碧玉の梢に、碎ける雨音パラパラ。十倍百倍に増えて、芭蕉葉にあたる雨音と調和する。ただひたすらに雨の珠は時に連なり時に散らばり、千粒にもなつて飛び散る。わけもなく盆や壺をひっくり返したように一晩中降り続く雨は、人の心をじりじりさせる。

當初、玄宗が楊貴妃の肖像畫を見て彼女を偲んでいた時の宮殿は夏であった。しかし西風が吹き陰雲が立ち籠めると、落ち葉舞う晩秋の雰圍氣に一變する。急に風が吹き陰雲が立ち籠めるのは、亡靈が登場する前觸れとして描かれることがあり、『梧桐雨』雜劇第四折で急に西風が吹くのも、楊貴妃の亡靈が登場する前觸れとして描かれていると考えられる。しかし、亡靈が登場する風は晩秋の季節を呼ぶ西風である必要はない。西風は第二折や第三折で馬嵬坡に吹く風であった。

つまり、第四折で亡靈登場の前觸れとして西風が吹くのは、まだ改葬されていない楊貴妃が、悲惨な最期を遂げた馬嵬坡からやつて來たことを暗示しているのではないだろうか。また第四折の夏から晩秋への突然の季節變化は、第二折に描かれた、亂の知らせを受けて馬嵬坡に向かう前後の季節變化の流れと共通している。このことから、第四折の西風、及び西風が呼び寄せる突然の季節變化は、楊貴妃の亡靈が登場

場する前觸れとして描かれているだけでなく、馬嵬坡前後の季節を意圖的に再現するために描かれていると解釋することができる。それは玄宗に馬嵬坡の悲劇を思い出させるためである。

楊貴妃を夢に見る前の玄宗は、宮殿の夏の季節の中で、楊貴妃と二人で過ごした甘い追憶にひたっていた。しかし、楊貴妃に夢に出て来て欲しいと思ひ、眠ろうとすると、西風が吹いて、邊りは一氣に晩秋の季節が呼び込まれる。眠りについた玄宗は楊貴妃を夢に見るが、夢から覺めても現實の宮殿の季節は夏には戻らない。そればかりか、秋雨は次第に激しさを増して、二人の思ひ出を知る梧桐に降りしきり、玄宗の心をも痛めつける。西風が呼び込んだ晩秋の季節によつて、玄宗は取り返すことの出来ない時間、受け入れざるを得ない現實を思い知らされ、そして如何ともしがたい感情に苦しめられるのである。

この晩秋の季節が玄宗を苦しめるという發想は、『天寶遺事諸宮調』にも見られるものである（前述「玄宗幸蜀」套數）。『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』は晩秋の季節を玄宗の心情を追い詰めるものとして描く、その發想も共通している。

『梧桐雨』雜劇の、特に第三折や第四折では季節描寫だけでなく、時間や天候の描寫にも、物語の展開、特に玄宗が置かれた境遇が反映されている。第三折に描かれる夕陽には、昨日まで皇帝として絶對的權力を持っていた玄宗が、臣下に楊貴妃の死を迫られる、權力者としての落日が象徴されていると思われる。

第四折の梧桐雨の時間帯は夜であるが、落葉が見える『長恨歌』と違い、『梧桐雨』雜劇では楊貴妃の亡靈が玄宗の夢に現れるがゆえに、夢を見やすい夜が選ばれたと考えられるが、それ以上に、夜には馬嵬坡での夕暮れの時間帯の續きとしての意味があるのではないだろ

うか。退位後の玄宗は日が沈んだ後の權力のない元皇帝であり、楊貴妃とはもはや夢の中でしか會うことができないのである。

一方、『天寶遺事諸宮調』には、梧桐雨の物語を描く套數が「憶楊妃」「明皇夢楊妃」の二種現存する。

「憶楊妃」套數は、「暮雨」から、夜ではなく夕暮れ時であることがわかり、「梧桐葉」が「楊柳」「西風」と共に描かれ、より『長恨歌』に近い印象を受ける。また楊貴妃が未だに馬嵬坡のそばで眠っていることも示される。

『天寶遺事諸宮調』「憶楊妃」套數（『雍熙樂府』卷十一）

「駐馬聽」不爲那楊柳情多。怯暮雨渾同人嬾娜。梧桐葉墮。蕩西風特似命輕薄。荒墳空對馬嵬坡。珠簾已閑朝元閣。恨無聊、看玉容何處添寂寞。

「駐馬聽」あの楊柳は多情なわけでもないのに、夕暮れの雨に怯えるのは、なまよしたあの人と全く同じ。梧桐の葉が落ちて、西風に揺られるさまは軽くて薄い命のよう。荒れ果てた塚は空しく馬嵬坡に向かい、宮殿の珠の簾を揺らす人はすでに朝元閣を閑散とさせている。恨みはやるせない。彼女の肖像畫を見れば、これ以上どこに寂しさを付け加えられようか。

「明皇夢楊妃」套數は、前半に『天寶遺事諸宮調』の物語全體をまとめる表現があるので、作品全體の最後の邊りに位置づけられていたと思われる。その最後の曲に楊貴妃が玄宗の夢に現れる内容が描かれる。『梧桐雨』雜劇と共通する部分も多いが、夢に現れた楊貴妃の様子が『梧桐雨』雜劇と異なる。

『天寶遺事諸宮調』 「明皇夢楊妃」 套數 (『雍熙樂府』 卷五)

「賺煞」 唉明皇心裏痛。快快歸來恨冗冗。寂寞雲屏秋夜永。恍然
間依舊相逢。意匆匆。霧鬢鬢鬆。兩葉眉兒淡遠峰。貪懽未罷、驚
回清夢。玉階前疏雨響梧桐。

「賺煞」 哀れ明皇は心を痛めて、鬱々と歸つて来てあれこれと恨
む。屏風の中で寂しく過ぎ秋の夜長。突然に昔さながら逢えた
彼女は、慌ただしく、髪はボサボサ、二つの眉は遠くの峰のよう
に淡い。愉しみを貪るのが終わらないうちに、はつと夢から覺め
れば、石段の前ではそばろにふる雨が梧桐に響く。

『梧桐雨』 雜劇第四折で玄宗の夢に登場する楊貴妃は後宮にいた頃
の美しさを保っていたが、「明皇夢楊妃」套數の楊貴妃は髪も化粧も
くずれ、慌ただしい様子である。これは馬嵬坡で死を迫られ、絶體絶
命の楊貴妃を描く「明皇代楊妃求情」套數の表現「寶鬢鬢鬆、玉容寂
寞、惜芳姿不勝憔悴。(髻はボサボサ、玉のかんばせは寂しげ、惜しいこと
に芳しい姿は憔悴に耐えきれない。)(『黃鍾宮傾杯序公篇』(『北詞廣正譜』
第一帙、『九宮大成譜』卷七十九))を想起させられ、楊貴妃の亡靈が西
風吹く馬嵬坡からやつて来たという印象を強く受ける。

ちなみにこの二種の套數に描かれる梧桐雨の物語は、『梧桐雨』雜
劇と比べると地味な描かれ方である。『天寶遺事諸宮調』の引子に相
當する套數三種のうち、内容が詳しい二種に描かれる物語のあらずじ
の終わりには「扶歸路、愁觀羅襪、痛哭香囊。(蜀からの歸り道で、愁
いながら薄絹の下衣をながめ、匂い袋にひどく泣く。)(『遺事引』套數「四
煞」(『雍熙樂府』卷七)、「三郎。歸來剗地哭香囊。(玄宗は歸つて来て

も、匂い袋に泣くことしかできなかった。)(『天寶遺事』套數「六公篇」(『雍
熙樂府』卷四))と、梧桐雨の物語ではなく、哭香囊の物語が書かれて
いる。引子の内容は『天寶遺事諸宮調』の物語全體を網羅している
は言いがたいが、この二種の引子で紹介されるあらずじの最後が哭香
囊の物語であることは、『天寶遺事諸宮調』の最後の物語にして玄宗
が楊貴妃を偲ぶ物語の代表は、梧桐雨の物語ではなく、哭香囊の物語
だと認識されていた可能性の低いことが考えられる。

おわりに

玄宗一行が都を逃げ出し、楊貴妃が馬嵬坡で亡くなるのは、『舊唐
書』『新唐書』『資治通鑑』等の史書には眞夏の六月の出来事として記
載されている。しかし『梧桐雨』雜劇第二折で、玄宗が馬嵬坡へ向か
う場面を想定した曲には、晩秋を思わせるわびしい風景が描かれてい
る。

作者の白仁甫は、史實の季節を知っていたと思われる。第二折で亂
の知らせを受ける前に晩夏の季節が描かれたり、第三折で晩秋のイメ
ージがより明確になる表現が避けられているのは、史實の夏の季節に
合わせようとした結果だと思われるからである。しかし第三折には、
晩秋を思わせるわびしい風景や、第二折にも描かれる夕陽が登場し、
第二折の馬嵬坡の風景との連続性が感じられる。

こうした季節描寫は、馬嵬坡で楊貴妃が亡くなる物語は晩秋の夕暮
れであるという風景のイメージが當時既に存在しており、白仁甫がそ
の虚構のイメージを變更すべきではないと判断して、『梧桐雨』雜劇
の季節を描いたことを示しているのではないだろうか²⁰⁾。

この、馬嵬坡の物語の晩秋の夕暮れという風景のイメージは『天寶

遺事諸宮調』により顯著に認められる。玄宗や楊貴妃が馬嵬坡に向かう場面や、玄宗が蜀に向かう幸蜀の場面を描く套數には、晩秋の季節や夕暮れの時間帯が描かれ、『梧桐雨』雜劇とも一致する。しかも、西風と夕陽という二つの風物が、『梧桐雨』雜劇と共通して描かれている。つまり『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』は、馬嵬坡の物語の背景に描かれる季節や時間帯のイメージが共通しているのである。

『梧桐雨』雜劇第四折で、楊貴妃の亡靈が現れる前觸れとして描かれる西風や、西風によって起こる夏から晩秋への突然の季節變化は、馬嵬坡前後の季節を意圖的に再現しており、そのことで楊貴妃の亡靈が馬嵬坡からやってきたことを印象づけて、玄宗に楊貴妃を救えなかつた馬嵬坡の悲劇を思い出させていると解釋することができる。こうした描寫は馬嵬坡の季節は晩秋であるというイメージがなければ成立しがたいものである。また『天寶遺事諸宮調』「明皇夢楊妃」套數で、玄宗の夢に登場する楊貴妃の慌ただしい様子は馬嵬坡で悲劇の死が迫る姿を彷彿とさせる。『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』は、『長恨歌』のような死後仙界に住む楊貴妃像を否定し、楊貴妃生前の追憶に浸る玄宗に、楊貴妃に悲惨な死に方を強いた過去を突きつけて更に苦しみを与える點でも共通している。

物語を一應漢代に假託している『長恨歌』だけでなく、『長恨歌傳』でも、楊貴妃が馬嵬坡で亡くなる時期は明確にされていないが、これはあるいは眞夏の六月という史實の季節が、楊貴妃の最期を描く物語の背景としてあまりふさわしくないと判断されたことを示しているのかもしれない。しかし元代前期の雜劇作家のうち、何人かの代表的な作家の作品において、馬嵬坡の物語は史實の眞夏と違う秋の季節で描かれている。史實を知っていたと思われる白仁甫も、史實に合

せる描寫を入れつつも、その虚構の秋の季節を最大限に生かして『梧桐雨』雜劇を作っている。このことは、これらの作品においては、歴史劇にふさわしい史書の記述に合わせた季節描寫よりも、夫婦の別離の物語を描く愛情劇という側面に照準を合わせて、物語展開やそれに伴う登場人物の心情に合わせた季節描寫が優先されていること、言い換えれば虚構性に重點を置いた季節描寫が選ばれていることを示しているのではないだろうか。

この變化については、韻文と散文の表現の違いという面も大きいであろうが、具體的な原因の一つとして、金代の『董解元西廂記諸宮調』(『董西廂』)の季節描寫の影響が考えられる。²¹⁾『董西廂』では、具體的には張生と鶯鶯の關係が進展する時は晩春の季節が、後退する時は晩秋の季節が描かれる。また『天寶遺事諸宮調』はこの『董西廂』の季節描寫を發展させて、春から晩秋の一つの季節の流れの中で、玄宗と楊貴妃の出会いから別れの物語を描いていると考えることができる。²²⁾『董西廂』は『録鬼簿』の記載から、雜劇への影響も少なくなかつたと思われる。『梧桐雨』雜劇が史實と違う晩秋の季節描寫を用いているのは、諸宮調における晩秋の季節描寫が持つイメージの影響が考えられるのではないだろうか。

ここまで検討して来たように、特に馬嵬坡の物語の背景に描かれる晩秋の季節、夕暮れの時間帯の一致から、『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』は、一つの楊貴妃の物語を共有している可能性が高いと思われる。『梧桐雨』雜劇は、『天寶遺事諸宮調』で描かれる物語のうち、秋の季節で描かれる物語を描いているという見方も可能であろう。²³⁾

『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』はこれまでも關連が指摘され

てきたが、『天寶遺事諸宮調』と物語や季節描寫等の様々なイメージを共有していることを踏まえて、『梧桐雨』雜劇を読むことは、當時の創作意圖や楊貴妃の物語の描かれ方や受容を探るうえで、有意義な視點を與えてくれるのではないだろうか。

注

- (1) 白仁甫について論じた和文の代表的なものに、狩野直喜「元曲の由來と白仁甫の梧桐雨」(『支那學文叢』(弘文堂書房 一九二七)、吉川幸次郎「元雜劇研究」(『吉川幸次郎全集』第十四集(筑摩書房 一九七四))がある。
- (2) 『梧桐雨』雜劇には元曲選本の他に、古名家本、顧曲齋本、繼志齋本、醉江集本があるが、繼志齋本は楔子を設けず第一折に統合している。
- (3) 元曲選本では楊貴妃のセリフから、私通の内容が削除されている。
- (4) 『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』の關連については金文京「白仁甫の文學」(『中國文學報』第二十六册 一九七六)が、特に『梧桐雨』雜劇第三折と『天寶遺事諸宮調』「明皇哀哭陳玄禮」套數との類似點を論じている。また竹村則行「楊貴妃文學研究」(研文出版 二〇〇三)でも、『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』の關係に觸れている。先後關係については、作者二人の推定される年齢差や白仁甫の文人としての地位の高さから、『梧桐雨』雜劇が先とする意見が強く、『元刊雜劇の研究』(二)『汲古書院 二〇一一』の「『旹夜郎』の解説(小松謙執筆)」でも、『梧桐雨』雜劇をふまえて『旹夜郎』と『天寶遺事諸宮調』が作られた可能性が高いとする。『中國大百科全書 戲曲曲藝』(中國大百科全書出版社 一九八三)の「王伯成」の項(鄧紹基執筆)では、『天寶遺事諸宮調』の「明皇哀哭陳玄禮」套數が『梧桐雨』雜劇に影響を與えた

『梧桐雨』雜劇の晩秋の季節

とするが、『天寶遺事諸宮調』は『梧桐雨』雜劇の後とする意見があることも添えている。

- (5) 『錄鬼簿』「王伯成。涿州人。有天寶遺事諸宮調行於世。(王伯成。涿州の人。天寶遺事諸宮調有りて世に行わる。)」天一閣本 賈仲明の補挽詞「天寶遺事諸宮調、世間無、天下少。(天寶遺事諸宮調、世間に無く、天下に少なし。)」(引用は『中國古典戲曲論書集成 二』(中國戲劇出版社 一九五九)による)
- (6) 王國維『曲錄』は、この二種の他に『興劉滅項』という作品の存在を指摘するが、筆者はこれをとらない。詳しくは拙稿『天寶遺事諸宮調』輯錄狀況表(『中國學志』大畜號 二〇一一)参照。
- (7) 『天寶遺事諸宮調』「漁陽十題」套數の「越調踏陣馬」が輯錄される『九宮大成南北詞宮譜』(『九宮大成譜』、乾隆十一年(一七四六)編)卷二十六の附記から、『九宮大成譜』の編者は『天寶遺事諸宮調』の原本を見ており、『天寶遺事諸宮調』の原本はそれまでは現存したと考えられている。
- (8) 主なものに、『太和正音譜』(洪武三十一年(一三九八)刊)、『雍熙樂府』(嘉靖四十五年(一五六六)刊)、『北詞廣正譜』(清康熙年間刊)、『九宮大成譜』等がある。
- (9) 具體的な輯錄狀況については、注(6)の拙稿を参照。
- (10) 拙稿『天寶遺事諸宮調』の物語展開と季節描寫(『中國古典小說研究』第十五號 二〇一〇)で論じた順序を用いる。
- (11) 前掲「楊貴妃文學研究」所收。
- (12) 前掲注(10)の拙稿。
- (13) 『長恨歌』の引用と書き下し文はすべて『新唐詩選續編』(吉川幸次郎 桑原武夫著 岩波新書 一九五四)による。
- (14) 清代の戲曲、洪昇の『長生殿』第二十四齣「驚變」では、この『梧桐

- 雨』雜劇「中呂粉蝶兒」を、夏の風景の描寫をなくして秋の風景の描寫を強めるように語句を變えて使用している。詳しくは竹村則行『長生殿』における季節の推移（前掲『楊貴妃文學研究』所收）を参照。
- (15) 『梧桐雨』雜劇のテキストは語句の異同によって大きく元曲選本と元曲選本以外の四本の二系統に分けられる。兩者は特にセリフに大きな違いの見える箇所があるが、本稿で引用する箇所では異同は比較的少ないと言える。本稿の引用には古名家本を使用し、元曲選本を適宜参照する。
- (16) 『舊唐書』では楊貴妃を自害させたとし（本紀第九）、『資治通鑑』では高力士に楊貴妃を絞め殺させたとする（唐紀三十四）。
- (17) 前掲注（4）の金文京「白仁甫の文學」論文。また前掲『元刊雜劇の研究（二）』『貶夜郎』の解説でも、『梧桐雨』雜劇第一折での楊貴妃が安祿山との私通關係をあかずセリフの内容が『天寶遺事諸宮調』の内容と一致することから、そのセリフが元代ものを基本的に受け継いでいる可能性が高いとしている。
- (18) 『天寶遺事諸宮調』には、玄宗が亂の知らせを受ける場面を描く套數は現存しない。
- (19) 前掲『新唐詩選續編』二十九頁。
- (20) 元曲選本では「晨光閃灼鴛鴦瓦」を「晨光閃爍鴛鴦瓦」に作る。
- (21) 元曲選本では最初の二行は「黃埃散漫悲風颯。碧雲黯淡斜陽下。」に作る。
- (22) 玄宗が馬嵬坡で樂士達に指示を出すのは不可解であるが、『梧桐雨』雜劇第二折「快活三」に類似の表現があることから、『哭香囊』雜劇「綿搭絮」では、その『梧桐雨』雜劇「快活三」に描かれた、宮殿での宴會で玄宗が樂士達に指示する場面を想定しており、本来なら美しい秋の季節を愛でながら音楽を演奏させ、楊貴妃と宴を催したいのに、と玄宗に
- 言わせることで、事態の急變に對應できていない玄宗を描いていると考えられる。
- (23) あくまでも『梧桐雨』雜劇や『天寶遺事諸宮調』を見た上での視点であるが、『長恨歌』で楊貴妃生前に頻出する「春」の文字は實際の季節描寫というよりは、玄宗が親子ほど年の離れた若い楊貴妃を得て若さを取り戻すことを象徴しているように思われる。近藤春雄『長恨歌・琵琶行の研究』（明治書院 一九八一）の「玉樓宴罷醉和春」の「醉和春」の解釋に「必ずしも實際の春を言ったものと解する必要はなく、それはむしろ酔うてうつとり和樂した境地そのものをさしている」と解したらよいことである」（二二七頁）とあるが、この「春」が境地を表すという解釋は「醉和春」以前の「春」にもある程度用いることができるのではないだろうか。ちなみに『天寶遺事諸宮調』では、楊貴妃が玄宗の後宮で暮らす様子を描く套數は實際の春の季節描寫と共に描かれる。
- (24) あるいは、玄宗が長雨降る蜀の棧道で聞いた鈴の音を元に「雨霖鈴」曲を作った物語（『明皇雜錄』等）から着想を得たのかもしれない。
- (25) 元曲選本は、セリフの「下」を「且下」に、「見芙蓉懷嬌臉」を「見芙蓉懷媚臉」に作る。
- (26) 『長恨歌傳』「時移事去、樂盡悲來。每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落、梨園弟子玉瑄發音、聞霓裳羽衣一聲、則天顏不怡、左右歎歎。三載一意、其念不衰。求之夢魂、杳不能得。（時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。春の日、冬之夜、池蓮夏に開き、宮槐秋に落つるに至る毎に、梨園の弟子は玉瑄もて音を發し、霓裳羽衣一聲を聞けば、則ち天顏怡はず、左右歎歎す。三載一意、其の念衰はず、之を夢魂に求むるも、杳として得ること能はず。）」（引用と書き下し文は『新釋漢文大系 白氏文集 二下』（明治書院 二〇〇七）による）
- (27) 元曲選本は、セリフの「一陣沉困」を「不覺一陣昏迷上來」に、「伴

讀書」の「一點兒」を「一會家」に、「披衣」を「俺這裏披衣」に、「業眼難熬」を「業眼難交」に、「笑和尚」の「滴溜滴彫」を「原來是滴溜滴透」に、「落葉飄」を「敗葉飄」に作る。

(28) 元曲選本は、「蠻姑兒」の「枝葉」を「殘葉」に、「滾綉球」の「傾一宵」を「下一宵」に作る。

(29) 關漢卿『寶娥冤』第四折「雙調新水令」「慢騰騰昏霧裡走、足律律旋風兒來。則被這霧鎖雲埋。攛掇的鬼魂快。(ゆつくりと暗い霧を歩き、スルスルとつむじ風がやって来る。霧に閉ざされ雲に埋もれることで、うながされて亡霊は速くすすみます。)」

(30) 『梧桐雨』雜劇における、馬嵬坡の物語の風景の虚構のイメージは來源をどこに求めることができるであろうか。季節描寫と諸宮調の關連が深いことを考えると、『天寶遺事諸宮調』の季節描寫を『梧桐雨』雜劇が取り入れた可能性も考えられるが、兩者の關係については更に検討すべき事項も多く、季節描寫だけで判斷することはできない。また『梧桐雨』雜劇や『天寶遺事諸宮調』以前に、文字化されていない馬嵬坡の物語の傳承が存在した可能性や、唐本「明皇幸蜀圖」の模本が宋代でも有名であったこと(衣若芬原著 森岡ゆかり譯注「台北故宫博物院本「明皇幸蜀圖」と白居易「長恨歌」」、『白居易研究年報』第11號 二〇一〇)参照)から、繪畫等文學以外の世界で馬嵬坡や幸蜀の物語が形成された結果の産物という可能性も考慮に入れる必要があるかもしれない。多岐にわたる問題である故に今後の課題としたい。

(31) 「このように春と秋の季節の推移の中で、悲しみと喜びが交互にめぐる。それに加えて多くの曲辭によって、春愁と秋思、春と秋の景色を描き、いわゆる情景相融の効果を存分にあげているのである。」(金文京『董解元西廂記諸宮調』の構成と言語表現について)、『東方學報 京都』101(1)

(32) 前掲注(10)の拙稿を参照。

(33) これまでの検討から、『梧桐雨』雜劇と『天寶遺事諸宮調』の物語展開は基本的に一致していると考えられる。従って『天寶遺事諸宮調』の物語展開は、従来の研究が依據している「遺事引」套數に描かれる、長生殿七夕の後に楊貴妃と安祿山の私通、安祿山の左遷という順序ではなく、以前筆者が注(10)の拙稿で論じたように、楊貴妃と安祿山の私通、安祿山の左遷の後に、長生殿七夕という展開であった可能性の高いことが、『梧桐雨』雜劇の展開からも裏付けることができる。